

障害とアートの相談室

なやんで



ひらいて



2歩すすむ

ためのハンドブック



障害とアートの相談室

なやんで

ひらいて

2歩すすむ

ためのハンドブック

はじめに

近年、全国各地の多くの福祉施設で創作活動が盛んになり、展覧会やアートプロジェクトが開催され、個性豊かな障害のある人の表現に出会う機会が増えてきました。奈良県内でも、多くの福祉施設で創作活動が見直され、新たな取り組みが行われています。一方で、障害のある人の創作活動に関わる支援者や家族、また当事者から具体的な悩みや相談が聞かれることも多くなりました。これらの悩みや課題は共通することも多々あり、アート活動に可能性を感じながらも、いまひとつ活動に踏み出せないでいる、または進めていく上で、ちょっとしたことでつまずき、同じような壁にぶつかっている人が多いのではないかと感じてきました。

そこで、活動に取り組みたい、活動をもっと進めていきたいと思い、実践する人たちの背中を押すことができるような、そんな本をつくりたいと考えました。

この本をひとつの事例に、課題や壁を楽しみながら、ぜひ現場で障害のある人とともにアート活動にチャレンジしてみませんか。多様な担い手が多様な活動を実践することで福祉の現場がより魅力的なものになり、また障害のある人がアートを通して地域や社会のなかで、もっともっと役割を果たしていくことができればと思います。

一般財団法人たんぼぼの家

この本には……

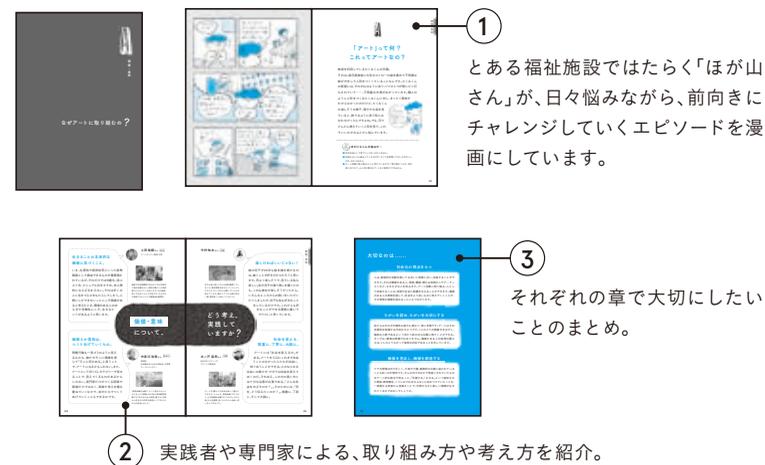
- ・ 具体的な悩みや疑問はたくさん出てきますが、答えが書いてあるわけではありません。もしかしたら、ヒントはあるかもしれません。
- ・ 言葉や事例を手がかりに、自分と置きかえて考えてみてください。
- ・ ハンドブックをポケットに入れてチャレンジしてみましょう。

読んでもらいたい人は……

- ・ 障害のある人と創作活動に取り組んでいる人、または取り組みたい人。
- ・ 取り組んでいる人や取り組みたい人の周りにいる人(同僚や障害のある人の家族、当事者など)。
- ・ 活動に興味をもってくれる人は誰でもOK!

内容は……

創作活動が社会とつながるまでの流れを章ごとに紹介しています。それぞれのテーマに沿ったコラムも。



もくじ

| | |
|----------|---|
| A | 価値・意味： なぜアートに取り組むの？ 05 |
| B | 道具・画材・素材／環境／支援： 創造的な活動が生まれる環境とは？ 11 Column「創造的な環境をつくる」 24 |
| C | 仕組み／資金： マネジメントの視点も重要です！ 27 Column「表現を社会につなぐマネジメント」 36 |
| D | 保存・記録／発表： 社会に発表していきたい！ 39 Column「展覧会開催までのステップ」 48 |
| E | 権利／仕事： 権利を守り、仕事につなげたい！ 51 さいごに 62 |

福祉施設の職員になって3年目。去年からは施設内でアート活動をはじめ、日々奮闘するポジティブマン。せんべいトレーナーがお気に入り。



A

価値・意味

なぜアートに取り組むの？



A

「アート」って何？ これってアートなの？

施設を利用しているたくみくんの日課。

それは、毎日昼食後に牛乳のストローの袋を集めて不思議な結び方をして人形をつくっていることなんです。たくみくんの部屋には、それが山のようにあり、1つひとつが壁にピン打ちされていて……、不思議な光景が広がっています。職人のように人形をつくるたくみくんに対し、まったく意味がわからなかったのだけど、たくみくんの楽しそうな様子、穏やかな姿を見ていると、捨てるように言う気にはなれなかったんですね。でも、日々どんどん増えていく人形を見て、これでいいのかなあと少し悩んでいます。



ほかにこんな悩みが…

- 何を作品として見ていいのか、わかりません。
- 作品はどんどん溜まっていきますが、すべてを保管しておいた方がいいのか、わかりません。
- アート活動に取り組みたいと考えていますが、「取り組むことが、何の役に立つの?」と上司に聞かれて、うまく説明ができません。

生きることの本来的な価値に気づくこと。

いま、生産性や経済効率といった貨幣価値として換金できるものが重要視されているが、それだけでは均質化、低コスト化、マニュアル化をすすめ、非人間的にならざるをえない。それは多くの人に生きづらさをもたらしてしまう。人間にしかできないことにこそ価値があると考えたとき、障害のある人のゆらぎや多様性にこそ、生きるヒントがあるように思います。



上田 祐嗣さん 高知

アートセンター画案 代表



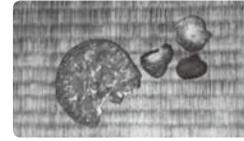
画案では発達障害のある人たちが日常的に創作活動を行い、普段の暮らしの延長線上にもものづくりがあります。その価値、楽しさを多くの人と共有する、さまざまな地域プロジェクトや展覧会を展開中。

今村 知左さん 京都



楽しければいいじゃない！

娘の花子が25年も絵を描き続けるのは、描くことが好きだからだろうと思います。何より楽しそうで、見ている私も楽しい。私が花子の食べ残しを撮ったのも、これも彼女が楽しそうだったから。いろんなところからお誘いをいただいたりしましたが、花子も私も好きなことをしているだけです。これからも好きなことができる環境に置いてやりたいと思っています。



花子が食べ残したものを毎日撮影していました。賛否両論あるなか、アーティストやギャラリストの方々が驚いていたのを覚えています。嫌がっていた父親が実は一番、根気強くつきあっていました。

どう考え、実践していますか？

価値・意味について、

価値とか意味は、つくりあげていくもの。

問題行動も一見ゴミのように見えるものも、誰かがそこに価値を感じて「そこに何かある」と言うことで、アートになるかもしれない。また、アートという切り口、カテゴリーで見せることで、見えてくるものがあるかもしれない。専門家だけがつくる評価や価値だけではなく、実践や考えを積み重ねていくなかで、自分たちでつくりあげていくこともできるのです。



中津川 浩章さん 神奈川

美術家、社会福祉法人みぬま福祉会 工房集 アートディレクター



“表現活動を仕事に”という考えのもとにはじまった工房集。2012年の東京都美術館での「生きるための表現」展では、日常から生まれた切実な表現として121人もの人が出品しました。



木ノ戸 昌幸さん 京都

NPO法人スウィング スウィング施設長



アートを「暮らしや社会を楽しく豊かにするもの」ととらえ、清掃活動「ゴミコロリ」や芸術創作活動「オレたちひょうげん族」などを展開、多くの人たちと出会い笑い合ってきました。

社会を変える、慎重に、丁寧に、大胆に。

アートには「社会を変える力」がある。アートを入口にこれまで出会うことのなかった人たちが出会い、知り合うことができる。小さな小さな出会いの数々が、やがては社会を変えてゆくのだ。それゆえ、この力の扱い方には十分な注意が必要である。「どんな社会をめざすのか?」。そのためには、「何を、どう伝えたいのか?」。慎重に、丁寧に、そして大胆に。

大切なのは……

社会化の視点をもつ

人は、創造的な活動を通してお互いに刺激し合い、成長することができます。それは障害のある人、家族、職員、関わる地域の人やアーティストなど、さまざまな人を含みます。アート活動に取り組み、人として成長することは、地域や社会に影響を与えることができます。障害のある人の表現を通して、社会をより良いものに変えていくことが、その表現の価値を高めることにもつながります。

ちがいを認め、ちがいを大切にす

私たちはそれぞれ個性も能力も異なり、実に多様です。アートはその多様性を保障する方法のひとつです。1人ひとりの肩書きをはずし、個別の人間であるという当たり前の立ち位置に戻すことができます。そこでは、障害は問題ではありません。障害のある人の表現の豊かさは、1人ひとりちがって独特な存在であることを示しています。

価値を見出し、価値を創造する

ケアの現場は日々忙しく、介助や介護、事務的な仕事に追われていることも多いのが現状です。そんな日々のなかで見過ごされていたものをアートの視点で見る。「支援する／される」という固定された関係、既成概念、こうしなければならないと決めつけていたことを、一度異なる角度から見直すことで、日常のなかに新しい価値が生まれてくるのではないのでしょうか。

B

道具・画材・素材
／
環境
／
支援

創造的な活動が
生まれる環境とは？

B-1

1人ひとりにあった道具や画材、 素材をどうやって選んだらいいの？



アート活動をはじめて1年。

最近、頭を悩ませているのは、絵を描くのがとても大好きなえみちゃんのこと。その理由は、前衛的な表現とも言える、斬新な画材の扱い方にあります。実は、えみちゃん、紙の上にアクリル絵の具をチューブから2秒ほどですべて出しきってしまうんです。出した絵の具は、両手でぐるぐる。どうも、その感触がたまらないようなんです。とても楽しそうな姿を見ていると、途中で止めることもできず。「芸術は爆発だ!」「表現は自由だ!」と言えども、どんどん絵の具は減っていく一方です……。



ほかにこんな悩みが…

- 道具や画材などは、どこで購入したらいいでしょうか？
- 握力が弱く、すぐに筆を落としてしまう方がおり、頭を悩ませています。何か良い方法はないでしょうか？
- 手を汚したくないという人がいます。創作活動を続けるためにはどう対応したらいいでしょうか？

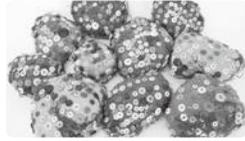
生活に寄り添い、
勤を働かせることが大切。

どんな素材がその人の表現に適しているか、少しずつ時間をかけて、いろいろなものを試しながら本人の興味を探っていきます。手触りや音などその人にとって心地良いプロセスを見極めるとともに、最終的なかたちをイメージするのがスタッフの役目です。自ら主張する人が少ないので、日常生活の様子や性格などから勤をはたらかせています。



早川 弘志さん 滋賀

社会福祉法人やまなみ会
やまなみ工房 副施設長



作家の井村ももかさんは、もともと織りの班に参加していましたが、なかなか気が乗らず。ボタンつけの仕事をしていただいたところ、本人が楽しんで集中しはじめ、こんな作品が完成しました。

光島 貴之さん 京都

美術家、鍼灸師



手触りのちがう布・ひも・金属プレートなど厚みのあるものを板パネルに貼りつけると、大いに触覚を刺激する「触覚コラージュ」が完成します。ホームセンターや100円ショップは素材の宝庫です。

指先で楽しむことができる
素材はたくさんあります。

全盲なので指先で判別できるものを使います。アニメーションや建築模型に使うラインテープで線を描き、カットイングシートで色やかたちを強調。いずれも粘着式なので、指先がボンドにまみれて感覚が失われることなく、画用紙やアクリル板やガラスに貼ることができます。ワインやウイスキーの瓶に貼りつけることで「ボトルアート」として作品化することも。

道具・画材・素材

どう考え、
実践して
いますか？
について、

本人に合っていれば、
身近なものも材料に。

障害のある人たちの作品展をキュレーションするため、多くの施設や個人を訪問してきましたが、どんな画材を選べばいいのかわからないという声をよく耳にします。画材には、その用途や値段によってさまざまな種類があります。まずは制作者と向き合い、その人に合った画材を提供することが重要です。それがチラシの裏やダンボール、セロテープということもあります。



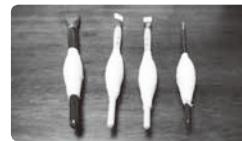
宮下 忠也さん 京都

アートディレクター



色鉛筆や絵の具は、値段により色の濃さや鮮やかさ、耐光性などに大きな違いがでできます。画材屋は法人対象割引があることも。また学校用の美術教材カタログでもおおよその価格相場がわかります。

山口 まゆみさん 奈良



筆を握りやすいようにテーピングで下地をつくり、その上に伸縮包帯を。さらに一番上に引っつく伸縮包帯を巻き、握る部分を太くします。絵具で汚れたら一番上の伸縮包帯を取り換えるので、便利です。

本人が使いやすい
自助具の工夫を！

娘のみづほは、油彩、アクリル、クレヨンなどいろいろな画材を使用し、絵画制作をしています。そこで、身体に障害のある彼女に適した自助具を試行錯誤しながらオリジナルで製作。親が画材や道具を支援し、活動は福祉施設で職員と連携しながら行っています。彼女の作品をみなさんに見てもらえるように、自宅の一部を改装したギャラリーで常時展示しています。

B-2

集中して創作できるスペースは どうやってつくったらいいの？

少しずつ広がってきた施設内での創作活動。

「もっと力を入れたい！」と、ホールの一隅を使って、利用者のみなさんが常時創作できる作業スペースをつくってみました。当初は穏やかにはじまったように見えたのですが、お気に入りの場所の争奪戦や利用者同士の複雑な人間関係などから、だんだんとカオスな空間に……。

もっと広い場所に移動してみたものの、気づけば徐々にみんなの足が遠のいてしまい、誰も集まらない始末。それぞれの利用者が集中して気持ち良く創作できる空間って、どうやってつくったらいいのでしょうか？



ほかにこんな悩みが…

- 固定で創作できるスペースの確保が難しく、悩んでいます。
- 参加する利用者によって、相性が合わなかったり、モチベーションにばらつきがあったり、なかなか落ち着いて創作活動ができません。
- 建物が古く、創作活動に向けた空間が作りにくい気がします。もっと学生さんやボランティアの人にも来てもらえる、開放的な空間にしたいです。

「住まいのサイズ」は、 「生きる場」にぴったり。

言葉もなく、こだわりの強い人たちとともに生きる場を探すなか、たどり着いたのが、大きなスペースではなく、「住まいのサイズ」。もともとの建物の裏にあった町家を買取り、アトリエを増設。町家のつくりは日本人の体にも最適で、四季の移ろいを五感で感じさせてくれる中庭も豊かな表現活動につながります。また地域交流の拠点にもなっています。



白岩 高子さん 大阪

NPO法人コーナス
代表理事



コーナスを利用するメンバーは、日頃の人間関係や来客などで体調が変わります。天井から下げられるロールスクリーンはその場でさっとおろし、音や風景をゆるやかに遮断。クールダウンができます。

鈴木 励滋さん 神奈川

NPO法人カブカブ
地域作業所カブカブ 所長



雑然としている喫茶カブカブ。長居する地域住民も少なくないのは、整然とした場に必須の、立派な人間としての振る舞いなど、ここでは誰も求められないからかも。指揮者(!)がいる店先の風景。

いろいろな人が雑然と 居ていいんだという空気。

“アートのためのスペース”という以前に、場を豊かにすることが大切だと考えています。私たちの仕事は、「The 正解」に導くことだと思いがちですが、そんな勘違いが作業所を利用する1人ひとりのかけがえのなさを潰し、場の可能性を殺します。「いろいろな人が雑然と居ていいんだ」という空気が場を満たすと、カオスを愉しむくらいの余裕が生まれてくるはずです。

環境 について、 どう考え、 実践して いますか？

1人ひとりにあった 制作スペースを用意。

賑やかな場所を好む方は、みんなで共通の画材を使用し、ひとつの大きな机を使って制作を行います。外の景色が気になる方や集中したい方は、窓際や壁側に机を向けて制作。さらに周囲の環境に影響されやすく静かな場所を好む方は、専用の部屋で自分の画材を確保し、マイペースに制作に取り組んでいます。1人ひとりにとって心地良い制作環境を心がけています。



中谷 有香さん 奈良

社会福祉法人青葉仁会
アート部門担当スタッフ



「森琴の部屋」と呼ばれる、1人で過ごしたい人の専用のスペースがあります。壁紙を工夫したことで、落ち着いて集中して制作できるようになりました。

阿曾 麻里生さん 奈良

社会福祉法人いこま福祉会
かざぐるま 支援員



「創作クラブ」では、講師を招き毎回異なるテーマを提案。テーマに合わせて環境のレイアウトを行っています。「創作の時間」と「創作クラブ」、両方楽しんでいる利用者さんもいます。

モチベーションによって 参加形態を分けています。

アート活動に対しての意欲は人それぞれです。つくりたいものが決まっていたり表現に集中したい人のための「創作の時間」と、季節ごとにお題を立てたり、公募展などの目標を設定して和気あいあいと取り組む「創作クラブ」、2つの参加形態を用意しています。画材やサポートの仕方も変えて、より多くの人にアートを楽しんでもらえるようにしています。

B-3

創作活動をサポートするには どんなスタンスで関わればいいのか？



クレヨンで絵を描くのが好きな利用者・れんくん。

お昼になっても食事に行くことを忘れるくらいに、いつも熱中しています。が、ちょっと気になることが……。制作している様子を見ていると、ある時点までは、もくもくと集中して、人物画を描いているのですが、少し目を離すと、描き進んでいった先に、いつも用紙が真っ黒に塗りつぶされてしまうんです。「ああ、素敵な絵があったのになあ」と心のなかでつぶやくのですが、途中で止めるように促したほうがいいのでしょうか？ それとも見守るべきでしょうか？



ほかにこんな悩みが…

- 障害のある人の動機や意欲をどう高めたいのでしょうか？
- 作品へと仕上げていくにあたって、サポーターとしてどこまで制作に介入していいのでしょうか？
- 専門的にアートを教える人来てもらいたいのですが、アーティストはどのような風に支援しているのでしょうか？

人が人として 居られる場づくり。

定員10人に対し、身体、知的、精神とさまざまな障害のある人40人が登録しており、毎日いろんな人が訪れます。障害福祉サービスの事業所だけれど、障害を見るわけではなく、人を人として見るだけのこと。“福祉”とか“美術”という言葉で縛られると難しくなる。普通のことと一緒にできることが大切であり、支援という言葉で難しくしてはいけないと思っています。



新川 修平さん 兵庫

NPO法人100年福祉会
片山工房 理事長



スタッフをお願いしているのは、花を飾ること。いままで枯らしたことはありません。そして花を見れば整えがわかる。花を枯らさないなど、細かいところに注意が払える人であることが大切だと思います。

岡崎潤さん 大阪

デザイナー、
アービカル☆ディレクター



月に1回でも充実した時間を過ごすことで、その1ヶ月が穏やかで健やかなものになる。たとえ毎月通えなくても、持ち味を認めてもらえるという安心感が日常の支えになり、生きる力となるはずです。

場をつくるのは、 個人と個人の信頼関係。

障害のある・なしに関わらず、誰もが参加できるアート教室を開いています。大切にしていることは、1人ひとりに寄り添い、イイところと一緒に喜びあうこと。自分の意思でずっと通い続けてくれる人がいるのは、ここが家や職場(施設)でもないもうひとつの居場所になっているから。心を開き自由に表現できる場は、誰にでも必要なのではないでしょうか。

支援 について、 どう考え、 実践して いますか？

仕上がるまではあなた、 完成したら僕の仕事。

作者たちは、作品を通して社会に発信します。それを前提に、作者と見る人の間に立つのが私たち職員です。作者が言えないことを汲み取り、想像してみなさんに伝える。作品に注目していただけるように、タイトルも職員が考えています。制作準備と完成後が私たちの出番。「仕上がるまではあなたの仕事、仕上がってからは僕の仕事」、という役割分担ですね。



小野寺 聡さん 奈良

社会福祉法人在友会
フレンズまきば
アトリエ創佳舎 支援員、画家



《冥夢百鬼夜行図》作者の高田千恵子は、奈良県北葛城郡上牧町にある、たこ焼き屋に併設されたアトリエで活動中。タイトルは職員がつけました。ですが、本人はタイトルにはまったく関心がないようです。

前川 紘士さん 京都

美術作家



障害のある人とアーティストがペアになり創作をする「アートリンク・プロジェクト」に参加。関わり方を模索しつつ、協働のあり方、待つことなどを意識しながら行いました。

「何かをしたい！」 という動機が大事。

制作で関わるときには「指導する」のではなく、参加している人ともう言葉や言葉を具体的に出しながら様子を見ます。そのなかから「何かをしたい」という動機を見つけることが大事。お互いのズレやその時々の方のバランスを感じながらどう付き合えるかが重要だと思います。「わからないこと」に敬意を払いながら、1つひとつ共有するものを増やしていけばいいと思います。

Column 創造的な環境をつくる

障害のある人の生きる力を育む、はたらく人や訪れる人にとっても心地良く開放的で創造的な空間とは？ここでは、「場所をどうとらえるか」「環境をどう整えるか」といった2つの視点を紹介します。

意識が変われば、施設も変わります

文: 佐久間 新

[ダンサー/ジャズ舞踊家]

気持ち良い場所はどこにもあります。日常の場所に少しスキマやマドが開いていればいいのです。床に寝転がれる、自然光が入る、響きが良い、良い風が入ってくる。

新しくつくらなくてもいいんです。関わる人の意識を変えれば、気持ち良い場所はどこにも生まれます。そして、そこで起こることをプラスにとらえ受け入れる。すると、場所や人や時間が少しちがって感じられます。みんなの動きに愛着がわき、美しく見えはじめると、もうダンスが生まれています。

1本の木、階段、ひとつの窓からもダンスの場は生まれる。施設が変わる可能性があります。

障害のある人とダンスをしていると、輪のなかに入るのが苦手という人がいます。輪に入らなくても、同じ空間にいれば、あるいは通り過ぎれば、それも「参加している」と意識して見ます。遠くで背中を見せていても、輪の方に気を向けている人がいます。人のつながりを広くとらえてみるようになると、こちらの変化に彼らも気づきます。すると「つながり」が豊かになる可能性が膨らみます。

日常的な些細なことへの愛着や美の発見は、障害のある人とアートを試みる第一歩です。そこで生まれるアートは、障害のある人だけでなく職員の心の豊かさや仕事への愛着や誇りを生むことにつながると思います。



障害のある人だけでなく、スタッフや地域の人々がダンスを楽しむ場をつくっています。ときには事務所に入らずにダンス空間を生み出すことも(たんぼぼの家にて)。

障害のある子どもの成長を育む環境づくり

文: ト部 奈穂子

[合同会社ベン具 児童デイサービスベングアート 代表]

療育プログラムのキーワードは成功体験です。「構造化」することで子どもたちが1人ひとりの特性を大事にしながらかアート活動を楽しめるように、またアートの身支度や後片付けなどを通して生活の力をつけていけるようにしています。

例えば、空間については、準備をする場所/活動場所/休憩場所を区切る、個人の活動場所を区切ることで集中できる環境を整えます。時間については、準備の時間/創作の時間/休憩の時間に分けています。

手順も大切です。創作の時間では、自由な画材やモチーフを使って描く創作活動、決められた画材や手順に基づいての創作活動を選べるようにしていますが、そのときに1人ひとりの特性に合わせた「創作手順書」があることで、1人でも作品を完成させることができます。

また、絵の具を出す量や水を入れる量などがわかりにくい子どもには、パレットや水入れに線を引いて、視覚的にわかる工夫をしています。

アートに苦手意識がある場合、もともと嫌いだというよりも、やり方を知らずに困っている場合もあります。まずは、環境を整えることでやり方を手助けし、その上で表現を伸ばすこともできるのではないのでしょうか。

いろいろな自由があっていい。選んで描いたり、手順書を見て描いたり、好きに描いたり。できるところを伸ばし、できないところは環境を整えることでできるようになる。自己実現につながるように、成長期においては発達療育的な視点から、環境のデザインをすることも大切です。



福祉の枠を越えて、多くの人に自閉症スペクトラムなどへの理解を広め、社会参加へとつながるよう、札幌市を中心にアートイベントなどを行っています。

大切なのは……

クリエイティブな環境をつくる

アート活動に取り組むのは、クオリティの高い作品をつくることだけが目的ではありません。クリエイティブな発想や考えをもとに、福祉の環境自体がクリエイティブなものに変わることであり、何より障害のある人が人間として成長していくことが大切です。支援という言葉を超えた豊かな関係を育む、そのような場所にこそ、ユニークな表現や作品が生まれるのです。

興味をもつ能力を育む

障害のある人は小さい頃から周りの人に「がんばって障害を乗り越える」ことを望まれ、そして自分で考える以前に必要なものを準備されることがあります。これらは、多くの人が障害のある人にとって必要だと思う最善の判断をしているからでしょう。しかし、もっと大切なのは「興味をもつ能力」を育むことではないでしょうか。意欲をもってチャレンジし、失敗も含めたいろいろな経験を通して、自ら人生をデザインしていくことができます。

多様な表現の可能性を知る

障害のある人といっても人は1人ひとり、個性や能力が異なります。また身体・知的・精神など障害の特性により必要とすることも異なり、「障害」と一言でくくれるものではありません。そのなかで、表現したいという気持ちをどう支えられるかが課題です。適した材料や道具、表現の形態をともに考え、現場のアートプログラムも多様であるべきです。そして向き合う私たちも、新しいアートのかたちを一緒に発見していく、そんな気持ちで取り組んでみてはどうでしょうか。



マネジメントの視点も
重要です！



6-1

業務と創作活動の両立、 どうしたらうまくできる？

働きはじめて3年目の僕。

利用者の送迎やプログラム運営、食事介助、家族とのやりとりなど日常のさまざまな業務に奔走しながら、その合間に、アート活動のサポートをする毎日。利用者それぞれの表現が大好きで敬意をもつ一方、さらに発展させたいと考えています。でも、施設職員としては、まだまだ半人前の自分がアートのプログラムに集中することができる状況ではないのもよくわかるんです。そんな葛藤を抱えながらも、どうするのがいいのかわからず、日々、悶々としています……。



ほかにこんな悩みが…

- ケアがメインの仕事なので、創作活動や展覧会などの準備に時間を取られてしまうと、ほかのスタッフに負担がかかってしまいます。
- アーティストや講師を呼びたいと思って提案しても、上司から「資金的にも難しい」と言われ、説得できません。
- 施設内に、同じ目線で目標や悩みを共有できる人がいません。

増え続ける業務、 整理して強化しよう！

福祉の仕事は多様化し、法定のスタッフ配置で行うには限界があります。でも数々ある仕事には、本来行うべきことと、ほかに委ねられるかもしれない仕事が含まれます。例えば、商品化、営業、販売など別部門を創設するか、外に委ねられないだろうか。そこでしっかりビジネスし、日常的な支援と将来の暮らしにつながる人づくりを、本来の仕事として高めていきたいです。



吉田 修一さん 福岡

NPO法人まる
工房まる 施設長



週に1度、メンバーミーティングを行っています。外出をどうするかなど、毎回テーマを決めて議論。視点を変えることにより、つながりが深まったり、知らなかった想いに触れたりできます。

高鍋 篤子さん 奈良

社会福祉法人わたぼうしの会
たんぼぼの家アートセンター-HANA
ケアコーディネーター



学びや楽しみ、癒しなどを支援するコミュニティカレッジプログラムは約20種類から選択可能。ネイルプログラムは自らキレイを実感でき、「見てみて！」と自慢もできる大人気のプログラムです。

アートもケアも相互作用。 「生きる」を支えています。

たんぼぼの家のプログラムは、主にアート、ワーク、コミュニケーション、ケアの4つに分かれています。最近実感するのは、ケアもアートも線引きがなく、人が生きていくための表現活動としては同じであるということ。長年関わっているパートのケアサポーターさんたちも、創作活動をサポートしたり、いろいろなアイデアを出してくれたり、現場には欠かせない存在です。

仕組み について、 どう考え、 実践して いますか？

スタッフさんの支援が 私の役割です。

大阪のはびきの園で7年間、アートやデザイン活動のサポートを担当。月1回アートの時間に通うほかウェブサイト制作などに関わっています。スタッフのみなさんは作品を良くしたい、個性のあるグッズをつくりたいと目的が明確なので、私の役割はスタッフさんのやりたいことを実現できるよう、いろいろな情報を集めサポートすることだと思っています。



吉田 マリモさん 京都

クリエイター



出会のきっかけは「施設のロゴを変えたい」というデザインの仕事の依頼でした。ブランドネーム、パンフレット、ウェブサイトづくりなど現場の魅力が伝わるようなデザインを心がけています。

山口 未樹さん 愛知

認定NPO法人ボバイ 理事長



障害のある人が社会参加できるよう多様なサポートを実施。週に1回、ダンサーとともに取り組んでいる「ウゴクカラダ」。自分が楽しければ周りも楽しい。そんな場づくりで世界をめざしています。

思ってもみないことが 起きる状況づくりが大切。

大切なのは、活動を継続させることです。アート活動だけではなく、外に出て、私たちが想像もしていないことが起きる場をつくっています。想いを込めて活動をしていると、まったくちがう分野でも、私たちの活動に共感してくれる人たちに出会い、一緒に課題に取り組んでももらえることがあります。保護者や支援者だけではない、広い関わりが継続につながると思います。



6-2

財源の裏付けに、いつも頭を抱えています……。

試行錯誤しながらも創作活動を続けてきたある日のこと。利用者が楽しそうに取り組む様子が評価され、施設側から画材費の予算を増やしてもらえるようになりました。これまでできるだけお金をかけないように格安の画材を入手するなど工夫して、活動を続けてきたことが報われた気持ち。そこで思い切って、大きな紙を購入してみました。すると、利用者の1人がそれを気に入ってしまい、「もっと大きな紙に描いてみたい!」とのこと。嬉しいことだけど、そんなに毎回お金を出してもらえるわけではないからなあ。



ほかにこんな悩みが…

- グッズ製作などで資金をつくりたいのですが、良い方法は？
- 活動をもっと飛躍させるために、展覧会を開きたいと考えています。どのくらい費用がかかるのでしょうか？
- 「助成金申請をしてみたら？」と言われるけれど、出したことがないので、書き方もアプローチ方法もわかりません。

商品も商品を開発する力も 育てていく視点が大切。

新商品開発では、試作制作費は授産会計から、デザイナーなどの費用は施設会計から拠出しています。それらは商品開発経費ですが、私は職員がものづくりの力をつけるための人材育成活動ととらえています。「資金ができたらやろう」では、いつまでたってもはじまらない。はじめは施設会計で補ったり、助成金を活用したりして、育てていくことも大切です。



北川 雄史さん 岐阜

社会福祉法人いぶき福祉会
第二いぶき 施設長



いぶきではものづくりを所得保障、社会発信、自己実現、つながりの構築の手段と位置づけています。東京での展示会に「百々染」を出展した際には、保護者も自分ごととして宣伝し足も運んでくれました。

金武 啓子さん 大阪

社会福祉法人ノーマライゼーション
協会 西淡路希望の家
美術部代表



「生活になじみやすいものを」という想いから生まれたカレンダー。施設には、絵が描けなくても数字なら描けるという人も多く、個性的な文字が集まりました。新しいヒット商品です。

障害のある人も一緒に 販売活動しています！

カレンダーやTシャツづくりはボーナス活動なので、利用者もスタッフも目標に向かって燃えます。売り上げ報告会もイベントみたいに。数年前にカレンダーを絵から文字のデザインにしたことで、これまでより多くの利用者が関わることができるようになりました。「がんばってるから買ってください」ではなく「僕がこの文字書いたんやで」という方が売れるんです。

資金 について、 どう考え、 実践して いますか？

施設を開かないと 意味がない！

NPO法人として活動しており、運営は、大きく社会福祉事業と文化センター事業の2つに分けています。それぞれ固定費などの支出、受託事業・助成金事業など、事業の性質にあわせて窓口を設けていますが、本質はひとつ。福祉事業においては施設を開かないと意味がないと思っていますからです。障害のある人もない人もともに混ざりあうことをめざしています。



久保田 翠さん 静岡

NPO法人クリエイティブサポート
レッツ 理事長



2014年に地域に開かれた居場所をめざし、「のづあ公民館」をオープン。誰でも来られる自由な場所です。さまざまな講座を用意し、それぞれに参加費を設定。障害のある人も講座や運営の管理をしています。

柴崎 由美子さん 東京

NPO法人エイブル・アート・ジャパン
代表理事



2014年展覧会支援の部の受賞の竹下基行さんは、津波に耐えた岩手県陸前高田市の奇跡の一本松を描きました。選考には、美術の専門家に加え、支援企業の社員さんが加わることも、この賞のユニークな点です。

応募することが 次へのチャンスに！

障害のある作家の発掘と創作現場への支援を目的に「エイブル・アート・アワード」を実施しています。展覧会支援の部では、銀座のギャラリー「ガレリア・グラフィカbis」での開催を支援。画材支援の部では、油絵の具やアクリル絵の具を画材メーカーの協力のもと提供しています。資金や資源を集め、応募の機会づくりをすることが中間支援組織の役割だと考えています。

Column 表現を社会につなぐマネジメント

障害のある人のアート活動を支え、社会につなぐためには、理想の環境を思い描くと同時に、それを実現する仕組みづくりや資金の確保も必要となります。ここでは、そのためのアイデアを紹介します。

資金確保のアイデア

助成金

公的機関、民間団体などが助成を行っています。募集方法には公募制を取り入れているものも。助成金の申請から事業の実施、報告までその運用にあたっては、膨大な事務作業が必要になることもあります。それゆえに、その団体の社会的な信用度を高めることもつながります。助成金情報は、右記のWebサイトなどで発信されています。

※Webサイトの情報は、2015年3月時点のものです。

クラウドファンディング

近年、注目されている資金集めの方法のひとつに、クラウドファンディングがあります。クラウドファンディングは、不特定多数の人が通常インターネット経由で個人や組織に財源の提供や協力などを行うことを指す、群衆(crowd)と資金調達(funding)を組み合わせた造語です。自ら選んだプロジェクトを比較的少額から支援できる気軽さと、ソーシャルメディアなどによる情報入手の容易さ、オンラインで利用できる利便性などから国内でもサービスや利用者が増加しています。

ネットTAM

トヨタが企業メセナ協議会と連携して運営する、アートマネジメントに関する総合情報サイト。主にアートに関する助成金情報を掲載。
www.nettam.jp/funding/

東日本大震災 芸術・文化による復興支援ファンド「GBFund」

企業メセナ協議会が立ち上げた芸術・文化による復興支援ファンド。趣旨に賛同する寄付者とともに、被災者・被災地を応援する目的で行われる芸術・文化活動や、被災地の有形無形の文化資源を再生する活動を支援。原則として年2回、GBFundへの活動申請を募集。
www.mecenas.or.jp/gbfund/

NPOWEB

「特定非営利活動法人シーズ・市民活動を支える制度をつくる会」が管理・運営している、NPOのためのニュース&情報サイト。アートに限らず、さまざまな分野の助成金情報を掲載。
www.npoweb.jp/topics/news/subsidy/

公益財団法人 助成財団センター

助成・表彰・奨学などの事業を行う助成財団などの情報センター。アートに限らず、さまざまな分野の助成金情報を掲載。
www.jfc.or.jp/

CANPAN FIELDS

日本財団および特定非営利活動法人CANPANセンターによるCANPANプロジェクトのWebサイト。市民活動に取り組む方々の情報発信をサポートすることを目的としたツールを提供。主に全国規模で申請募集を行っている助成制度を掲載。
fields.canpan.info/grant/

仕組みづくりのためのアイデア

社会資源を活用する

環境を整える過程では、資金や物品のみでなく、専門知識が必要になることもあるでしょう。例えば、法的な専門知識が必要になった場合は、無料相談窓口にお問い合わせすることも可能です。

Arts and Law

無料相談では、弁護士などの国家資格をもち、守秘義務を課せられた専門家など(以下、「専門家相談員」)がプロボノ活動の一環としてボランティアで情報やアドバイスを提供。専門家相談員にはそれぞれ守秘義務が課されている。
www.arts-law.org/Consultation

夢をかたちにする仕組み

助成や寄付を通し、資金や物的支援をすることは、その活動に共感し、活動を支援したいという気持ちを示すこと。つまり、それらを受けることは、単に必要なものを獲得することではなく、多くの人と夢を共有していく作業でもあります。一方的に援助を受けるといった感覚ではなく、ともに活動をつくっていくという意識で積極的に活用していきましょう。ただ、助成金の多くは“シードマネー”です。その資金をもとに、次の活動に向けた実験や調査、基盤整備の費用として考えることが大切です。どのような活動も、1人で行うには限界があります。重要なのは、より多くの人を巻き込み、社会的認知度を高めることです。

アートプロジェクトのための7つのP

プロジェクトを実現させるために欠かせない、7つのポイントがあります。進行中のプロジェクトも、定期的に確認してみることをおすすめします。

- ① Poem 夢やコンセプトを言葉にする
- ② Planning 具体的な計画をたてる、企画書をつくる
- ③ Presentation 他者に想いを伝える
- ④ Partnership 多様な人とつながることから創造性が生まれる
- ⑤ Practice 実現にむけて必要なことを学ぶ
- ⑥ Perform かたちにして見せる
- ⑦ Passion すべての原動力となる情熱をもつ

大切なのは……

切実なニーズに向き合い、応えていく

魅力ある活動をつくっていくこと、そして継続させていくためには知恵と工夫が必要です。プログラムも事業も、運営費や計画などの事務的な環境を整えるだけでは実現できません。現場にいる障害のある人や取りまく状況のなかにある切実なニーズにいかに応えていくかという真摯な姿勢や対話、チャレンジや失敗の繰り返しのなかから、組み立てていくことができるのです。

意識を共有し、仲間をつくる

アート活動がはじまって継続し、そしてアートスペースができていくには、1人の想いだけでは無理です。何が必要で何をめざしていくのかをまわりの人と共有することが必要です。まわりの人とは、同僚や上司であるかもしれないし、地域の人、アーティスト、障害のある当事者かもしれません。その共有した意識から生まれるエネルギーをもとに、仕組みをつくり、場をつくっていくことができるのです。

活動を意味づけし、実績を積んでいく

福祉施設のなかでアート活動に対しての予算を確保するには、施設のなかで何がしたいか、きちんと説明することが大切です。そして取り組んだ後には実績などのノウハウを共有し、成果をわかちあうこと。活動への信頼を高めていくことは、その活動に対しての意味を自分のなかで再確認することでもあります。これは補助金や助成金など外部の資金を獲得するのにも必要なことです。



社会に発信していきたい！



D-1

作品の保存・管理は、 どこに・どうしたらいいの？

創作活動の支援をはじめて早くも2年。

念願叶って、奈良で活動するほかの福祉施設から、展覧会への出品依頼が届きました。「ぜひ参加させてください！」と即答し、はりきって準備をはじめたものの、とても良いと思っていた絵がどうしても見つからない！ 確か、食堂の棚の上に置いてあったはずなんだけど……。作品保管用の倉庫は無く、あちこちにある施設の空きスペースに作品を置いているので、念のため施設中探しまわってみるけれど、やはり見つからない(涙)！ 気を利かしたスタッフが片づけてくれていたようで、開催2日目に見つかりました。



ほかにこんな悩みが…

- 施設に作品の保管場所がなく、置き場に困っています。家にもって帰ってもらっても、きちんと保存してもらえているか不安です。
- 作品が汚れたり、こわれたりしないように保管したいのですが、梱包の材料はどこで売っていますか？
- 作品は、一応写真で記録していますが、どう扱ったらいいかわかりません。

作品は身近なところに。 場所をとる額は倉庫へ。

以前は休憩スペースに作品を置いていましたが、作品の量が増えてきたので、別の場所に倉庫を借りることに。最初は作品もそこに保存しようとしていたのですが、展覧会の準備などを進めたりする上では近くにある方が便利なので、いまは額と大きな作品は倉庫で、作品はアトリエで保管しています。データベースとの連動も進めています。



池永 健介さん 福岡

NPO法人まる
工房まる主任



紙の絵画作品は、壁一面の棚に作家ごとにクリアファイルに入れて保存。アトリエに見学に来る人も希望があれば、作品をすぐに見ることもできます。

吉永 朋希さん 奈良

社会福祉法人わたぼうしの会
たんぼの家アートセンターHANA
プログラムディレクター



データベースでは、作家の情報(履歴やプロフィール)と作品情報(サイズ、素材、制作年、価格、額装)などを記録。保管ボックスの外にもシールで貼ることでわかりやすく誰でも管理が可能に。

データベースをつくることで 発表もしやすくなります。

作品のコレクションは作家と相談し行っています。管理は①現物は倉庫に、②ファイルメーカーでのデータベース、③高解像度の作品画像をハードディスクに保存しています。この管理をはじめ、外向けに紹介するときのスピードがアップ。作品の一覧などの提供依頼にも対応しやすく、自分たちで企画するときも、販売された作品の履歴も含めて確認できます。

保存・記録

について、

どう考え、 実践して いますか？

作者自身が 作品管理をしています。

作者のなかには、作品を誰にも触られたくないという人がいます。活動をはじめた当初は作品を保管する場所すらありませんでした。そこで大きなダンボールを切って、1人ずつの名前付きの箱を制作。箱はご自身で管理していただいています。作品は写真で記録し、閲覧することが可能です。意識を高めるためにも、作者が自分で出し入れできることが大切だと思っています。



高田 芙美さん 奈良

社会福祉法人総合施設美吉野園
わーくさぼーとPono生活支援員



施設リニューアルに合わせ、これまでの実績を評価され備品として保管の箱を購入してもらえることに！ 今後はダンボールより良い材質のものを設置。施設の改装や補修のタイミングは良い機会です。

中野 厚志さん 岡山

株式会社ぬか
生活介護事業所ぬかつくるとこ 代表



メンバー・戸田雅夫さんの個性から生まれた「とだみくじ」。運勢ではなく、自身の絶妙なメッセージを書いた札を本人から渡されます。子どもから大人まで、身にしみる言葉に励まされる人多数。

「いとをかし」の まなざしで日常を記録

活動をしていくなかで、作品だけではなく日々の些細な出来事をスタッフもメンバー自身も見逃さないよう心がけています。そこから生まれた「うまみ」が豊かな表現になるからです。メンバーの日中記録にも工夫をしていて、「特記事項」に「いとをかし」という項目を追加。マイナス面よりも、メンバーのポジティブなおもしろさを自由に記載し共有しています。

D-2

たくさんの人に 作品を見てもらいたい！



いよいよ僕たちの施設が自主企画で展覧会をひらくことに。せっかくの機会だから、できるだけ多くの作品を展示したいなあと思って、これまでつくられてきた作品を並べてみることにしました。点数を絞って出品しようと考えていたけど、やっぱりどの作品も捨てがたい……！ 作者に聞いてみても、全部出したいと言うし。最終的には、みんなで話し合った結果、すべての作品を展示することに決めました。そこで、壁や天井、床も使って展示をすることになったのだけど、それでもまだ全然スペースが足りない！ こういうときどうしたらいいのでしょうか？



ほかにこんな悩みが…

- いろんな人に見てもらいたいのに、関係者しか来てくれません。
- 展覧会をひらくには、まずどこから手をつけたらいいのでしょうか？
- 発表してもいまいち、作者本人の実感がないような気がします。
- 展覧会に出なかった人のご家族から、「どうしてうちの子の作品は展示されなかったの？」と悲しい顔をされてしまいました。

作品は生活のなかから 生まれてくるもの。

展覧会となると、どうしても身構えてしまいがちですが、作品は日々の生活のなかからしか生まれてこないもの。よそいきの自分を飾り立てても、見る人にはわかってしまう。ただ、その作品の魅力を最大限に引き出す方法というものはある。展覧会の質を上げるにはさまざまな配慮が必要です。発表の機会を得ることが、作者の精神の発露になることを願っています。



森口 ゆたかさん 大阪

美術家、
NPO法人アーツプロジェクト代表



コンセプトづくり、案内状の制作からはじまり、作品の選定、作品の設置方法、空間演出、照明の当て方などで、展覧会の質は大きく変わります。作品が自由であるように展示も自由でいいのです。

田口 ひろみさん 宮城

社会福祉法人 山元町社会福祉協議会
山元町共同作業所
(工房地球村) 施設長



全盲の方が週に2回通ってくれています。絵の展示が変わることは毎回会話のなかで知って楽しんでくれているようです。地域でアートを楽しめることは確実に地域の人を元気にしていると思います。

絵があるカフェは、 みんなの居場所に。

震災後、地域の人たちの“心の拠り所”をつくり、町の復興に貢献したいとの想いから「カフェ地球村」をオープンしました。カフェで絵を飾ることでお客さんが珈琲とお菓子とともに絵を見ながら楽しんでくれる。その様子を見ると、カフェのスタッフも嬉しくなるといふ相乗効果が発生。地域の人たちに地球村の存在を理解してもらうことにもつながっています。

発表 について、 どう考え、 実践して いますか？

公募展がきっかけで つながる縁。

作品を発表するお金も人脈も機会もないというときに出会った公募展。内輪の評価ではなく、第三者の反応を知ることができました。どの公募展も出展料がさほどかからないので、気軽に応募しています。審査結果からどんな作品が評価されるのか、傾向もわかってくるものです。入選がきっかけで出展依頼をいただいたり、ネットワークが増えたりすることも魅力ですね。



日垣 雄一さん 大阪

株式会社YELLOW
代表取締役



2009年にオープンした、大阪府内に数少ない、株式会社で運営している就労支援施設です。日々のサポートに追われつつも、いつかは自分たちで企画・運営にチャレンジしたいと思っています。

池崎 多佳子さん 大阪

Port Gallery T 代表



2011年8月にホテル客室で発表された《Houses I have lived》は、作家のジョミキムさんが実際に暮らした家で、素材はマスキングテープ。軽やかさとともに深い問いを差し出していました。

発表される場は、 出会いの場でもあります。

プレゼンテーションの方法は多岐に渡りはじめ、インターネットでできることも増えました。しかし表現は、人の営為のありよう、もしくは心や想像の内に去来する事々を目に見えるかたちに置き換えたものです。つまり「実存」と、私は考え、「実際に発表される場＝出会いの場」はとても大事な存在だと思って仕事をしています。大小問わず、この現実社会に開かれた場で。

Column 展覧会開催までのステップ

展覧会はアーティストが自分の想いを伝える舞台であり、地域や社会への接点であり、仕事につながるチャンスにもなります。ここでは、展覧会をひらくためのステップを紹介します。

開催前に行うこと

- 1 開催期間、会場を決める**
コンセプトや目的にあわせた会場を選ぶ。ギャラリー、美術館、カフェなどの環境、また奈良県、関西、東京、海外などの地域性も併せて考えましょう。会場の予約は半年から1年前に。
- 2 企画書をつくる**
趣旨や目的、概要(期間、会場)、内容、出展者の紹介、予算スケジュールなどを盛り込んで作成。協力者や外部の人に対し、メッセージが明確に伝わるように意識します。
- 3 予算を立てる**
収入＝作品販売や物品の販売などの売上。支出＝会場借用料や、額装代、印刷費、送料、記録費、交通費などにかかる費用。それらのバランスをとって、収支予算をきちんとつくります。障害のあるアーティストが社会に参加する自覚をもち、アート活動を持続可能な活動にしているためにも慎重に考えます。
- 4 実行体制をつくる**
出展者、スタッフ、ボランティアなどでチームをつくりましょう。作品を管理する人、展示する人、広報する人、ちらしをデザインする人、会計担当者など、チームで目標を共有しながら役割を担えるようにします。
- 5 作品を選び、展示プランを立てる**
コンセプトに沿って作品を選びます。空間全体を演出する気持ちでプランを立てましょう。
- 6 広報を行う**
マスコミやフリーペーパー、Webサイト、SNSなどを使って広く広報します。またわかりやすく、展覧会の意図や概念が伝わるプレスリリースを作成します。ダイレクトメール、ちらしも作成・配布するなど、できるだけ多くの人に見てもらえるように工夫しましょう。

7 搬入の準備を行う

作品が映えるようにきちんと装丁し、作品以外の備品の準備も忘れずに。出展者のこれまでの作品や記録、制作の様子が伝わる資料や受付に必要なものなど、意外とたくさんあるので、展覧会をイメージして準備しましょう。

開催中に行うこと

- 1 イベントの開催**
オープニングパーティーやギャラリートークを行うなどして、出展者や家族、関わってくれた人たちと交流できる場をつくりましょう。
- 2 記録を行う**
作品の展示風景や出展者の記念撮影なども記録します。ただの記録だけでなく、次の展覧会のプレゼンテーションの資料にもなるので、こまめに行います。

開催後に行うこと

- 1 お礼状を出す**
来場者や作品の購入者など、協力してくれた人たちに対してお礼の言葉を決して忘れないように。
- 2 ふりかえりと評価を行う**
主観的なふりかえりに加えて、入場者数や来場者のアンケート、作品販売の記録などもまとめて、次の展覧会に生かせるようにします。ここから次の発表の場に向けた準備ははじまっているのです。

アーティストが来場者と交流できる場づくり

2014年夏に開催された、世田谷で活動している「ハーモニー」による、「シリーズ存在と生活のアートー新・幻聴妄想かるたとハーモニー展！」(A/Aギャラリー/東京)。こころの病とともに過ごす人たちの日々を自らの言葉と絵で綴ったかるたと、写真家・齋藤陽道さんの写真作品による本展は、ほぼ毎週末、当事者によるイベントを実施しました。「新・幻聴妄想かるた世界一決定戦」や、日替わりトークショー「幻聴妄想ラジオ局」、メイドカフェ「妄想天国@メイドちゃん」など。精神障害のある当事者やスタッフが、来場者と交流する貴重な機会となりました。



大切なのは.....

「表現を大切に作る」気持ちを伝える

作品はその人の思想や感情の表現であり、その人が生きてきた証しであるともいえます。特に重度の身体障害のある人は寡作であることが多く、できる限り丁寧に向き合い、大切に扱うことが必要です。その態度や姿勢は必ず身近で見ている作者や周囲の人にも伝わり、美術館やギャラリーなどへ貸し出した際にも伝わり、第三者にも丁寧に扱ってもらうことにつながります。

地域の資源を利用する

かたちあるものは必ず変化していくように、どんな作品でも必ず劣化していきます。しかし、使う画材や保存方法、扱い方の知識や技術を学ぶこと、なにより丁寧に扱うことで劣化のスピードを確実に遅らせることができます。画材屋に相談する、美術を専門とする教員にアドバイスをもらうことなど、地域の資源を活用することからはじめましょう。

記録することと発表することはつながっている

作品の情報を記録するのはもちろん、作者本人やその創作の状況・背景を記録することも大切なことです。どういう想いで描き、普段何が好きだからその作品が生まれたのか。そうした情報を提供することで、より関心をもってちがった角度から作品を見られることもあります。記録は、次の発表の機会に向けてのプレゼンテーションに使えたり、展覧会を構成するひとつの大切な要素になったりするので。



権利を守り、
仕事につなげたい！



E-1

著作権のことが気になるけれど、 どういったことが大事なの？

はじめての展覧会も大盛況のうち幕を閉じました。

たくさんの人に来ていただき、おかげさまで施設の関係者や 家族だけでなく、地元の人などにも喜んでもらうことができ ました。そんなある日、展覧会終了後、近くの商店街から嬉 しい相談が。「利用者のあつとくんの絵で、夏祭りの手ぬぐ

いをつくってほしい！」との依頼でした。僕ははりきって、 慣れないデザイン作業にチャレンジ。

翌朝、あつとくんに見せたところ、 「僕の絵じゃない」と一蹴。良かれ と思って、カラフルにしてみたの だけど、気づけば原画とは全然ち がうものになってしまった……。



🐱 ほかにこんな悩みが…

- アニメのキャラクターが好きで、そればかり描いている自閉症の人が います。展覧会で発表してもいいのでしょうか？
- 施設の利用者が辞めることになってしまいました。これまで画材費を 施設で出してきましたが、その絵はどうするのがいいですか？
- 展覧会で販売をするときは、どのような契約書を交わしたらいいのですか？

個人を尊重する 社会のために

障害のある人がアート活動を行って作品を発表できること、その作品によって多くの人が感動すること、それによって、障害のある人が社会に生活している大勢の人と多様な交流ができるようになること。それは、障害のある人の個人の尊厳と幸福追求権（憲法13条）に極めて大きな意義があり、さらに、良き社会のあり方の根幹に関わることを考えます。



田中 啓義さん 奈良

弁護士
登大路総合法律事務所所長



「障害のある人の著作権に関するセミナー」を開催。著作権に関する基本的な知識を学びました。参加者からは実際の事例に基づいた質疑応答があり、みなさん熱心に聞かれている姿が印象的でした。

野村 ヨシノリさん 奈良

Gallery Out of Place 代表



東京と奈良にあるギャラリーの運営、アートフェアへの参加、アートプロジェクトの企画など、現代美術や作家の支援を行い、世界に向け発信しています。

表現やアートをもっと 鑑賞し、購入しよう！

「著作権を知る／体感する」早道として、展覧会で表現やアートをもっと身近に鑑賞してください。そしてぜひ購入してください。おいしい食材を購入するのと同じで、アートも身体に取り込んで、豊かな生活をつくりあげる材料です。買う経験がないと売るのは難しい。買うという行為が、つくっている作家の著作権を守ることになり、生活の支援をすることにもなります。

権利 について、 どう考え、 実践して いますか？

作者の権利保護は 法人全体で徹底！

みぬま福祉会は「どんな障害があっても受け入れる」という理念で、障害の重い人やさまざまな困難を抱えた人を受け入れてきました。ギャラリーを併せもつ工房集ができて13年。アート活動を行うメンバーも増え、作者の権利を守るよう法人全体で徹底しています。外部と仕事するには、私たち職員が著作権や作品の権利を知らないと表現活動を守れないからです。



宮本 恵美さん 埼玉

社会福祉法人みぬま福祉会
川口太陽の家副施設長
工房集 責任者



2012年にアパレルブランド「BEAMS」とのコラボレーションで、ポタンダウンシャツを販売。「一過的なものではなく、継続することに意味がある」という担当者の方の言葉通り、コラボは続いています。

島 麻絵さん 奈良

エイブルアート・カンパニー本部
関西事務局



ココヨのチェア。作品の背景色を変えたり、モチーフを繰り返すなど、商品化にあたりデザインを変更する場合は、作家に確認。原画の良さを生かしつつ生活になじむものにする事で、作品の可能性が広がります。

著作権使用の窓口として 中間支援的な役割を。

2007年、「アートを仕事にすること」を目的に設立しました。作品を企業などの広告や商品のデザインとして使ってもらう著作権使用の窓口になっており、現在86人の登録作家の作品約8,000点をウェブサイトで公開中です。個人の作家や福祉施設が大企業と契約を交わすのは時間的にも難しいため、その中間支援的な役割を担うことやプロモーションなどの営業活動を行っています。

E-2

好きなこと・楽しいことを 仕事につないでいきたい！



あつとくんの絵をモチーフにした手ぬぐいも大好評。正直のところ、これまで創作活動が仕事につながるという意識はあまりもっていませんでした。ただで観覧会で発表したご縁から、作品と出会って「いいな！」と思ってくれた方と出会えて、こうして仕事にもつながるなんて、ほんとうにありがたいかぎり。そんなある日、あつとくんが僕にお礼を言いに来てくれました。それだけで涙がでるほど嬉しいのに、絵の使用料を受け取ったとのことで、「今日は俺がおごたるわ！」と缶コーヒ-のプレゼント。こういった小さな感動が、この仕事の醍醐味かもしれません。



ほかにこんな悩みが…

- 原画を販売したくないという本人の意見を尊重したいのですが、ほかにどのような方法で収入につながられますか？
- 作品の値段のつけ方がわかりません。何かルールはありますか？
- みんながみんな絵を描いているわけではありません。どのように商品づくりなど、ほかの仕事とバランスをとっていったらいいですか？

クラフトも仕事、 アートも仕事。

もともと織りや染めなどのクラフト製作がメインでしたが、「質の高い製品づくりをめざしながらも、利用者の個性をいかしたい」と思い、アート活動をはじめました。仕事に対しての余暇活動ではなく、クラフトも仕事、アートも仕事という考え方です。唯一無二の表現をクラフトの原画にするなど、トータルで良い仕事をつくれるよう、相乗効果を狙っています。



高野 賢二さん 東京

NPO法人La Mano
クラフト工房 La Mano
施設長



伝統的な藍染めとユニークで暖かみのある作品の交差から生まれた「藍染kata手ぬぐい」。原画も型染のプロセスもメンバーが関わっています。2015年度ソーシャルプロダクツ・アワードにて受賞しました。

tomokoさん 東京

エイブルアート・カンパニー
登録アーティスト



自分の想像を超えたデザインで商品ができあがってくるのは、驚きでもあり、楽しみでもあります。一番気に入っているのは、H TOKYOのかわいくなったドクロのハンカチです。

商品になるというのは、 とても嬉しいことです。

障害のある人のアートという「芸術性が高いもの」というイメージがあり、私が描くようなイラストはちがうと思っていましたが、エイブルアート・カンパニーのWebページを見ると、明るくて、楽しい作品がたくさんあり、登録作家募集に応募しました。仕事としてお金としての対価だけではなく、商品になる楽しみもある。活動に参加できること自体が嬉しいです。

仕事 について、 どう考え、 実践して いますか？

施設の外でも 失敗できる機会を！

仕事を通して地域と共生することをめざしているため、作品だけを1人歩きさせず、作者の日常とあわせて伝えていきます。創作の仕事をいただいたときに、いかに施設の外で失敗できるかも大切。うまくやるではなく、うまくいかないこともクライアントと共有することで、関係が深まります。「成功」を数字だけでとらえずに、本人の個性の開花や成長も含めて考えています。



原田 啓之さん 福岡

社会福祉法人JOY明日への息吹
JOY倶楽部 アトリエブラヴォ
副施設長



ギャラリーなど、展覧会の作品販売を通して仕事の依頼を受けることもあります。ライブイベントの会場でのグッズ販売などは、本人のモチベーションにもつながるので、目の前で行っています。

富永 美保さん 福島

JDF被災地障がい者支援センター
ふくしま 支援員



「魔法のお菓子ぼろぼろん」では、お菓子を焼ける人が焼き、箱を折れる人が折ります。発送やパソコン作業を担う人も。より質の高い商品づくりをめざし、企業や専門家の協力体制も整いました。

弱みを強みに変える ワークシェアのしくみ。

震災後、障害のある人や障害者手帳をもたない福祉的配慮が必要な方たちと、仕事をつくることをめざしてきました。大切なのはワークシェアを目標とすること。自分の得意なことでみんなを支えることがそれぞれの自信と希望につながっています。就労系の事業所の商品がチャリティからビジネスモデルへ前進するためには、アートやデザインも大きな武器になるはずですよ。

大切なのは.....

権利の主体は障害のある人たちです

人は誰でも人間としての尊厳を獲得し、より豊かに生きていく権利があります。著作権を学ぶことは、かたちのないものに対する権利を認識するところからはじまります。絵画などの作品の著作権は作者である障害のある人のものです。「支援」や「保護の対象」「受給者」といった言葉は、ときに大切なことを見落としてしまう危険性があります。障害のある人のことを、当事者抜きにして決めてはならないのです。

守るだけではなく、攻めることも大切

権利を守るということは、作品を抱え込んでしまったままにしておくことではありません。作品は多くの人目に触れてはじめて、価値が見いだされ、販売や次の展示の機会につながることもあります。例えば二次使用の契約を交わすときに、独占的な契約を結ぶことが必ずしも不利になるとは限りません。独占的な契約を結ぶことで利益を得ることもあります。いろいろな状況のなかで選択肢を選び、権利を守ることが必要であり、ときには攻める視点をもつことも大切です。

自由なアイデアと発想で新しい仕事を開拓する

どんなに重い障害のある人でも仕事をしたい、誰かの役に立ちたい、そんな気持ちをもっています。また、1人ひとり得意なことが異なるように表現や仕事の可能性もきっと多様です。絵を描くことだけがアートを仕事にするわけではありません。現場にヒントがたくさんあります。そして、いろいろな人とつながり、知恵を出し合いながらチャレンジしましょう。きっとそこから、はたらきがいや生きがいのある仕事、市場が開拓されていくのではないのでしょうか。

「なやんで ひらいて 2歩すすむ」

このタイトルには、
課題があるのも、悩みがあるのも当たり前で、
1つひとつ受け止めて解決していくプロセスにこそ、
新しい回路があるという想いを込めています。

1歩目は、自分でやってみて。

2歩目を進めるのは、誰かと一緒だからこそ。

ときには立ち止まって、戻ってもいい。
飛んだり、座ったり、ぐるぐるしてもいい。
じっくり考えて、とにかくやってみよう。



さいごに

この本を読んでも、「まだまだ悩みや課題はつきない……」
と思いつち止まる人もいるかもしれません。

「仲間の1人だけ展覧会に出品できて、納得ができない」そんな障害のある人の声。人間だから、他人の成功を羨ましく思うときもあります。福祉施設も小さな社会。それを事前に摘んだり、なかったかのようにするのではなく、何か起きたときに受け止められる関係づくりも大切です。「絵を描ける人なんていない、うちの施設ではアートは無理」そんな施設職員の声。でも絵を描くことだけがアートではないのです。ダンスも、誰かにおいしいコーヒーを淹れることも、笑顔で過ごすことも、そしてそこに存在することも、アートにも仕事にもなるのです。

1人ひとりの可能性に光をあてることが、アートの視点であり、醍醐味です。そして、それを実現するのは、1人の気づきと行動であり、支えるチームの力です。今回は福祉の現場でのアート活動にフォーカスしましたが、自宅やアトリエをはじめ、さまざまな状況で活動している人もいます。それぞれの人たちが「自らの現場にある課題」に対して、いまの状況を変えるチャンスと受け止められるように。そしてアートをきっかけに、福祉の現場がより魅力的なものになるように。

毎日の出来事を楽しみましょう。

一般財団法人たんぼぼの家

困ったとき・情報がほしいとき・学びたいときは……



たんぼぼの家では、障害のある人の芸術活動について、全国の福祉現場の人たちとともに課題を共有し学び合う機会をつくってきました。このたび、障害のある人、その支援者の課題の解決、また情報交換やネットワークづくりの場として「障害とアートの相談室」をオープンしました。障害のある人の表現を通して、誰もが自由に表現できる社会、いきいきと生活できる社会をめざします。

- 1 相談窓口の設置
- 2 研修事業(施設見学ツアー、インターンシップ、セミナーなど)の実施
- 3 ネットワークづくり、作品、作家の調査・発信(調査、書籍の出版、展覧会開催など)

障害とアートの相談室 で検索してみてください！

<http://artsoudan.tanpoponoye.org/>

障害とアートの相談室

なやんでひらいて2歩すすむためのハンドブック

発行日：2015年3月31日

発行元：一般財団法人たんぼの家

〒630-8044 奈良市六条西3-25-4

Tel 0742-43-7055 Fax 0742-49-5501

Email artsoudan@popo.or.jp

URL <http://artsoudan.tanpoponoye.org/>

企画・執筆：阿部こずえ、岡部太郎、森下静香（一般財団法人たんぼの家）

編集ディレクション&編集：多田智美（MUESUM）

編集：永江大（MUESUM）

アートディレクション：原田祐馬（UMA/design farm）

デザイン：廣田碧（UMA/design farm）

漫画&イラスト：ニシワキタダシ

協力：井尻貴子、太田明日香

印刷・製本：株式会社山田写真製版所

＊本書は「平成26年度 障害者の芸術活動支援モデル事業（厚生労働省）」の一環として制作しました。



Tanpopo-no-ye Foundation
<http://artsoudan.tanpoponoye.org/>